

176

175

清水芳太郎講述

日米戦争避くべからず

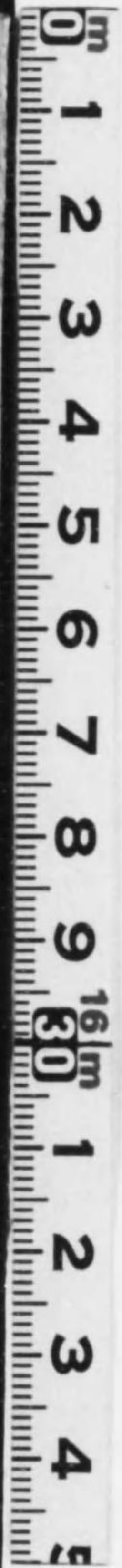
東京創生會版

4
4

特254

720

生
叢
書



始



特254
720

日米戦争避くべからず

清水 芳太郎 講述

最近日本の社會に於ける最大の關心事はアメリカ問題であらう。日米戦避け難しと考へる人の數は、こゝ數ヶ月間次第に増大したように思はれる。吾々は先づ日米が戦端を開くに至るか至らないかを先づ考へてみたいと思ふ。

日本とアメリカとが戦争になるかならないかといふ問題を決定するものは、ソ聯であるといふ事が出来るであらう。それは恰もドイツがイギリスと戦争する爲に、ソ聯と和解することが必要であつたと同じ事情からである。ソ聯が米國と結んで反日的傾向を示し來たるならば、日本の現在の爲政者は米國と一戦する決意をなし得ないであらう。また徹底した南進政策も採用し得ないであらう。ソ聯が米國とそれほど接近しないにしても、日本の南進の虚をみて攻勢に出るおそれがある場合に於いては、日米戦の可能は希薄とならざるを得ないのである。もし今日のソ聯がドイツに取つてゐると同じやうな態度を日



本にとるならば、日本は思ひきつて南進すると共に、英米とも結局は衝突することになるであらう。従つて日米の問題は、むしろソ聯の問題である。ソ聯の態度を打診することが即ち日米問題の將來を打診することになるのである。その意味に關する限りに於いて、ソ聯の態度を一瞥することにしよう。

二

最近、支那に於て國共抗争が問題となつてゐる。先般の議會に於てわが政府當局は議員の質問に答へ國共の抗争は相當ひどいものがあり、日本軍に對抗する兵力をも割いて共產討伐をやつてゐる有様であるが、然し蔣介石が抗日をつゞけて居る間は國共の分裂は起らないだろうといふ答辯をしてゐる。おそらく専門家の意見はさう觀てゐるやうである。然しながら、筆者は必ずしもさうとは思はないのである。何となれば、スターリンが蔣介石を援助しなければならぬ理由に大きな變化を來たしてゐるといふことである。即ち、從來スターリンが蔣介石を援助してゐたのは、いふ迄もなく日本の國力を消耗させるためであつた。然しながら、日本の國力を消耗させるのみなれば、それよりもつとよい手があるからである。即ち、日本と米國とを戦はせる事の方が日本と蔣介石とを戦はせるよりも、はるかに日本の國力を消耗させる力をもつてゐるからである。今日の重慶政府は相當疲弊し、抗戦力も非常に低下して經濟的にみても相當危険なる状態にある。物價指數は戦前の十二、三倍にも及び、食糧品の如きは十五六倍にも暴騰してゐる。従つて重慶政府は、日本の國力を消耗させる手段と觀るときには、餘りに大

なものではない。然し乍ら英米と日本が戦ふ場合に於ては、これも相當の長期戦になる可能性があり、重慶政府以上に日本の國力を消耗させる力をもつてゐる。

かやうに世界條件が變化し來つたのであつて、國共が何時までも分裂しないとみるのはどうかと思ふ。専門家ほど國共分裂を豫想してたのであるが、南京を占領しても國共は分裂せず、武漢さへ占領すれば國共は分裂するといつたが、それもしなかつた。そこで今日では、國共の分裂といふものは起らないことに決めて終つてゐるやうである。然しながら今回は分裂するのではないかと吾々は思ふ。ソ聯が軍事顧問を上げたことなどは、吾々の判断に一つの有力なる裏書きを與へて呉れた。もし國共が本格的に分裂の徴候を示して來るものであれば、それでスターリンの肚の底が讀める譯である。即ちソ聯は重慶政権援助の手を打ち切り、そののみならず積極的に重慶政権に共產黨を通じて反撃を加へるといふ事實を支那に展開しながら、日本の心理的變化を俟つて、日ソの全面的停戦和平を提議して來るものであらう。ソ満國境のみならず、蒙古、新疆及び支那の西北地帯一帯に亘つて、日本の勢力とソ聯の勢力との停戦和解を爲し、日本をして安心して南進せしめ英米と戦はしめんとするスターリンの考へであらう。現在ただ日ソの不可侵和解を提議しても、日本の國內の狀勢では簡単に纏らないことをスターリンは知つてゐる。そこで彼は、先づ日本の敵たる蔣介石に縁切狀を叩きつけ、日本と共同戦線を張つて蔣介石を討伐する現實を大陸に於て示しながら、日本の國內に於ける心理的變化と、世界狀勢の變化とを睨み合せ

て、日ソ不可侵條約を實現せしめやうと考へてゐるものであらう。

三

更に、國共分裂を中心として考へるときには、スターリンは、ドイツの英本土攻略が間近かに迫つてゐるといふ判断を下しゐるのではないかと思ふ。日米關係が緊迫し來るのは英本土がドイツの攻略をうけてイギリスの海軍がシンガポールや香港、濠洲方面に逃げて來る時からであるとみねばならない。カナダは放つておいても、米國が守つて呉れるとイギリスは見當をつけてゐるものと思ふ。従つて大西洋に於ける武装した諸島をアメリカに譲つてしまつた。イギリスの政治機關はカナダに來るかも知れないけれども、海軍は主としてシンガポールと香港を中心に陣を布くであらう。それからが世界の問題が太平洋に移るのであつて、日米問題もこれから始まるのである。その時期が己に近づいたとみて、その準備に着手しつゝあるのが先づ國共分裂ではあるまいかと思ふ。吾々もドイツの敵前上陸は霧の時期であらうと考へてゐたのであるが、その霧の時期の間で、更に何時頃であらうかと考へてみると、霧の時期が終りさうな時に行はれるのではないかと思ふ。更にヨーロッパの戦況を見ると、ドイツはバルカンにも兵を入れ、更にそれよりも南にさへ空軍を飛ばして、スエズ運河の爆撃までもやつてゐる。最近ではスペインとの協力によりジブラルタルの攻略さへも傳へられるやうになつた。北はノルウェーから南は北アフリカに戦線が伸びつゝあるのであるが、かやうに戦線擴大されることはドイツにとつて不利であ

る。何といつても英國は世界中に植民地をもち、平素そこに勢力を植へ付けて居るのであつて、ドイツから兵糧藥彈を運搬しつゝ、かやうな處にまで遠征することは、ドイツに極めて不利である。従つてドイツの英本國攻略の必要が差し迫つて居るとも考へられるのである。スターリンは、この世界的低氣壓がヨーロッパから西南太平洋に近く移動し來ることを觀測して、これに備へるところの手を着々と進めつゝあるのではないかと思ふ。日本にはまだ撃ソ派といふものがあつて、斯様な場合には蒋介石と手をつないで共産黨を撃つべしといふ主張をなすのであらう。また撃ソ派と雖もソ聯と戦ひ乍ら英米を討てるものとは思はず、従つて英米と提携し、蒋介石と提携して共産黨を討伐すべしといふ事になるであらう。然しながら、國論の大部分はソ聯と和解して徹底的に南進すべしといふことに傾くであらう。日本をして南進せしめるか否かは、今の處、ソ聯の態度如何にかゝつてゐる。今の處、スターリンはドイツに物資を供給し、ドイツをして思ふ存分英國と戦はしめてゐる。米國がイギリスを援助してゐるのと同じ立場である。今のスターリンの考へからすれば、結局日本をして安心して英米と取組ませる政策に出るのではないかと思はれる。

四

米國の對英武器援助案は膨大なる豫算の下に行なはれてゐるのであるが、これを實行するために、民間の工場も激しい齒車の音を立てて廻つてゐるのである。英國を援助するといふ言葉は今の處、ドイツを撃つといふ内容のものである事はいふ迄もない。然しながら、一度に英本土がドイツの攻略を受ける

ならば、英國の政治機關はカナダに逃げ、海軍は西南太平洋方面に逃げて來ることになり、英本土には或はウインザー公が再び皇帝となつて、親獨政權を作ることになるかも知れない。ウインザー公が再び皇帝にならないとしても、親獨政權が誕生することには間違ひない。そこで英國援助といふことは、内容が變化される事になつて來るのである。即ち、米國の武器貸與案は英本土に對するものでなく、シンガポールや濠洲に於ける英海軍を對象とするものに内容が變つて來るのである。そこで、英國援助なる言葉は日本討伐と同じ意味になるのである。今日、えらいスピードで廻轉はじめた工場機械が、ドイツの英本土攻略と同時にビタリと止まるものと思はれない。結局は米國の武器貸與案はドイツ討伐から日本討伐へと振り向けられつゝある。現在英本土に送られつゝある膨大なる武器その他の物資が、やがて日本討伐の武器物資と變ることは疑ひの餘地なきことであらう。

更に米國は、ドイツの擡頭によつてヨーロッパに對する貿易を失ひつゝある。米國總輸出額の約四割がヨーロッパ大陸に向けられて居たのである。その内の大部分は食糧品で、小麦等の農産物が多い。これは米國にとつて重大なる問題である。南洋に輸出することは不可能であり、結局支那に持つて來なければならぬであらう。支那は農業國でありなかく、その方法が幼稚なために、小麦や煙草や砂糖や、その他の農産物を原素でもつて輸入してゐたのである。然るに戦時下の支那は、更に食糧品が缺乏し、前述の如く、重慶政府治下では十五六倍にもなつてゐると云はれてゐる。

太平洋或ひは印度洋の方に英國の軍艦が逃げて來て、各處に援蔣ルートをコヂ開けやうとするならば米國は之を極力援助せざるを得ないであらう。英米の合作は、いよ／＼この時期より發展し來るのである。

五

然らば、もし日米戦ふが如きことあらば、どういふ形をなすであらうか。海軍の軍略的立場からみれば、噸數の多い方が必ず勝つといふのが原則である。従つて海軍は絶対に集團主義をとり、分散しないことが從來の原則である。然しながら、もし日米戦ありとすれば、日清戦争以後今日までの、この海軍の大法則を全く離れたところの、全く新しい戦争が繰展げられることであらうと思ふ。何となれば、日本海海戦のやうに集團形式に於ける戦闘に於ては、アメリカ海軍は到底日本の敵ではない。それを知りながら日本に戦闘を挑んでゐるのが米國海軍當局である。彼等は別な戦闘形式を考へて居ればこそ今日の如く、積極的に主戦論を主張し得るのだと思ふ。米國の今の状態では殆んど太平洋の無数の島々を利用し得るのである。フィリッピンやハワイは元よりであるが、蘭印及び英領諸島は全部米國の軍事基地として利用出来るのであるが、おそらくは米海軍は、從來の集團戦法とは全然逆の、分散戦法をとるであらう。これらの無数の島々に潜水艦や飛行機を分散せしめ、第一に視ふところのものは吾が輸送船である。長崎や門司から運送する軍隊や兵糧彈薬を満載した軍用船を、途中で撃沈させる事に努力する

であらう。もし香港やフィリッピンを中心とする數十の潜航艇の活躍がはじまるならば、上海や廣東に輸送する我が大陸連絡船は、夥しく脅威を感ぜざるを得ない。

第二に、彼等の視ふところは我國の商船である。我國の鐵礦石の如きは、その大部分を馬來半島から輸送し居ることはいふ迄もない。南洋や大陸との連絡がおよびやかされることになれば、日本の經濟の上に夥しい影響を與へて来る。もし輸送船の脅威によつて南支作戦が不十分になれば、南方に於ける援蔣ルートは開けつ放しとなり、蒋介石の復興は更に聖戰貫徹を永引かせる結果となる。我が無敵艦隊と雖も、この無数の島々にかくれたる敵の驅逐艦や飛行機を、一つ残らず殲滅するためには、相當の時間を要するであらう。かつてエムデン號が太平洋に出没した時に於いてさへも、これを捉へることは容易ではなかつたことを想起するがよい。

かくして新しい海の戦争が始められるのではあるまいか。從來の定説からすれば、海軍の戦争には長期戦といふものが有り得なかつたのである。兩艦隊が對峙して、いよ／＼砲撃を開始する事になれば、三十分もあれば勝敗が決まるとされたのである。然し乍ら今回の日米會戦は、この原則を裏切り、海の長期戦を展開するかも知れない。そして彼米國は戦争に勝つといふよりも、戦争を永引かせれば日本が經濟的に破壊するといふ處に着眼點をもつてゐるのだと思ふ。

即ち、陸の消耗戦によつて既に相當の程度に疲れて居る日本が、更に海軍力を消耗させて、もう一步消

耗の度合ひを強めるならば、日本は經濟的に破綻するといふのがアメリカの視ひどころであらうと思ふ

六

日本は、之れに對して如何なる對策を講ずべきであるか。結局日本としては英米を片附けぬ限り聖戰貫徹は期せられないのであるが、長期戦による事は日本としては得策でない。もし日本が、英國の軍艦がシンガポールや香港や濠洲方面に逃げ込んだり、アメリカの軍艦がフィリッピンや蘭印に入り込んだりしてから腰を上げるといふことになれば、結局長期戦にならざるを得ないのであらう。

面白い事に、太平洋の島はハワイから西の方にかたまつてゐて、それから東側の太平洋には島らしい島はない。つまり太平洋の真中から西半分は島がかたまつてゐるのである。更に面白いことには、ニュージーランドから南にも殆んど島がない。そこで、この西南太平洋に集團してゐる諸島の、外側の島々を日本が先に占領して終ふならば、英國も米國も手の出しやうがないのである。

桑港から日本を攻略するやうな事は不可能である。そこでシンガポールとか香港とか、フィリッピンとか、グアムとか、ミッドウエイとかいふやうな、海のトーチカともいふべき處に敵艦を遁入せしめてから戦ふ事にするか、若しくは日本が先きにそれらのトーチカに入り込んで、イギリスの軍艦が逃げ込んでくるのを迎へ撃つ體勢をとるかによつて、大勢は決すると思はれる。

日本が、蘭印に進駐し、更に次に南進するといふ戦法をとるならば、英米は南に陣を布いて之に對抗

410

461

し長期戦とならざるを得ないのである。しかし、蘭印などは放つたらかしておいて、外廻りの島々を日本が占有することになれば、日米戦争は蓋し起らないで済むかも知れない。

偉大なる軍略家と、偉大なる政治家とを國民は待望すること久しい。

東郷大將が「皇國の興廢此一戦にあり」と、日本海の戦争に於いて決意されたと同じやうな、皇國興廢の重大なる時期が切迫しつつあるやうに思はれる。(をばり)

(文責在編者)

昭和十六年四月五日 印刷
昭和十六年四月八日 發行

定價 金拾五錢

【製複許不】

著者 東京市赤坂區榎町十八番地
發行所 白木喜久次

印刷者 東京市芝區三田小山町一番地
中川暉敏

印刷所 東京市芝區三田小山町一番地
直靈出版印刷合資會社

東京市赤坂區榎町十八番地

發行所

東京創生會本部

終

